

「未来社会の仏教と私」

早田 啓子

人間がどのようにして誕生し、どこへ向かって進んでいるかという問いは人間が自己自身に問う永遠の命題なのかもしれない。そしてこの命題が現代ほど深刻に我々に問われている時代も、かつてなかったのではなからうか。勿論、過去の古代文化や未開文化を見ても明らかのように、人間は生きていく上で精神と肉体のバランスを工夫しながら生きてきたわけではある。

紀元前五百年頃に出た世界の宗教的天才たちは「言葉」と「肉体」の均衡の大系を整理した。その方法はある意味でその後二、三千年間の人類史の一面を各々の宗教において決定づけたと

もいえるかもしれない。しかし今やわれわれにとって問題なのは、この二十世紀末をいかに生き未来へ繋げるかという切実な問いであろう。つまり人類は自らがつくり出した高度に発達した文明の中で、それを支えるに足る統合的な思想的基盤の生みの苦しみに直面しているといっても過言ではあるまい。

かつてわたくしはこの問いを自己の問題として強く意識し、歴史への認識を確実なものとすることを願った。それは丁度、第二次大戦が終わり日本の昭和三十年代から始まる高度経済成長の時期と重なる。その頃の多くの若者がそう

であつたように、わたくしの足も必然的にアジアへ向かつた。まず最初に訪れたのはバングラデシュであつた。この国では喧噪と混乱と貧困が渦を巻いているような強い衝撃を受けた。死んだ子を抱えて道にしゃがみ込んで、ボクシーシ（お恵みを）とせがむ母親、また路上で病氣や飢えのために多くの人が植物が枯れていくように死んでゆく光景を目にした。かたや日本を含めた文明国は、その飽和した社会状況の中で内部的崩壊の兆しすら感じられた。わたくしはそこで人間とはいつた何かと問わざるを得なかつた。人間が生きていることや死ぬこと、日本が選択した戦後史、富の分配と貧富の格差、近代社会が内包する病弊等々。それでもわたくしはこの時代でできる限り自分の足で歩き、自分の目で見たものすなわち自分が自ら実感したことだけを「言葉」にしようとした。つまり「もの」と「観念」が遊離したまままで言葉を使うことを

恐れたからである。

いつたい、われわれは「近代」というものをどのように考えているのであろうか。十七・八世紀のイギリスやフランスのブルジョア革命、それに続く産業革命によつてヨーロッパは完全に資本主義社会を実現していった。日本の近代資本主義社会の実現はさらにそれより遅れることになるが、アメリカを含めた戦後世界史の流れは確実に近代化を推し進めていったのである。承知のように近代性とは合理的精神の追求であり、それが精神的なものであれ物質的なものであれ、パターン化され規格化されたもののみを優先するという価値観である。そしてそれはアメリカ社会の持つ現実的成功⇨欲望の追求と相俟つて、特に戦後一層拍車がかつたのである。そこでは当然のことながら人間存在につきまとう不条理や不合理性といった人間性は切り捨てられ、人間疎外の壁に直面せざるを得な

くなくなった。ヨーロッパを始めとしてアメリカや日本を含めた近代国家の歩んできた道は、その物質的豊かさと引き換えに人間性の喪失と自我の孤立化を招いたのである。日本に限っていうなら、アジアの中で明治以来の近代化の歴史の中でアジアの孤児となりまた、昨今は世界の国々の中で孤立化を深めておりそのために日本は自らの姿さえ、はつきり掴めなくなっている状態である。

わたくしはアジアを歩いてきた時、つとにこのような現代文明のありよう、近代化の詮ずる所を見つめながらアジア的な思考法ひいては仏教的思考法に目を向けていた。もとより仏教の基本的立場は、根本命題としての人間存在のありようを分析し認識するところから出発し、欲望をコントロールすることによって自己を発見することにあり。わたくしは新しい歴史の幕はやはり東洋的な思惟の中にヒントがあると考え

るものである。そしてそれは自と他の激しい攻撃を通した鋭い対立によって対象を否定する思想の対極に位置する考え方である。

さてわたくし個人の現地点での立場を述べるならば、目下のところインドの仏教美術の研究を開始している。思想を基盤に置いた仏教美術の表現の研究を通して仏教の真髓に迫ろうとするものである。わたくしは仏教の一つの宗派に属するわけでも、また修行をしているわけでもない。謂わばこの研究が修行の場であるといつてよいかもしれない。仏教表現の発露たる美術表現を研究し、表明することによって仏教の考え方を理解し普めようとするものである。

二十世紀末、人類の未来に何が待ち構えているかはわからない。はつきり言えることはわたくし自身が、その中に一人の人間として生きてゆくということだ。それは現代文明を視野に入れた、人間性回復への新しい道を模索するこ



とであり、主体的に歴史に働きかけて生きてゆく自己を全面的に己に引き受けて生きてゆくことに他ならないと考える。